



卷之二  
句法  
卷之二  
既末







Small, faint handwritten characters or marks on the paper, possibly bleed-through or a signature.







槐玉尺譜録



序

槐玉の地獄と云ふものありてその名は  
入るるに如くしていふことありてその  
手置の如くは白きなることありてその  
尺の如くは白きなることありてその  
舞向の如くは白きなることありてその  
大腕と云ふことありてその名は  
彼録より大腕と云ふことありてその名は



























其類は流言の整ふなりしを能めと好むる  
之類の流言の整ふなりしを能めと好むる  
 うんといふ  
之類の流言の整ふなりしを能めと好むる  
 其句の大既ありありとせむと指し人の  
 一物よりやと云ふなりといふありは櫻子の  
 古意下の筆下とほししとていふ  
 注解とさしほししといふは等々の義也  
 ありのこ

其類の云世書者以註解而為主の類  
 本より者畢きん目錄也正身録也其類  
 之書也別強而不可論之類之記實  
 與所見人可惟密之好

# 書目林



系す所二条  
 檜屋治吉衛



五





